

20. 開高健文学碑

開高健は小学校教員を父として、昭和 5 年（1930 年）天王寺区に生まれました。

7 歳の時に北田辺に転居し、昭和 18 年（1943 年）旧制天王寺中学（50 期生）（現・大阪府立天王寺高校）へ入学しましたが、在学中に父親が病没し苦学しました。

第二次大戦後、旧制大阪高等学校文科（英語）に入学、学制改革により、翌年大阪市立大学法文学部法学部に編入（大学 1 期生）しました。

大学在学中に谷沢永一主宰の同人誌『えんぴつ』に参加、昭和 27 年（1952 年）1 月に同人仲間の牧羊子と結婚します。羊子の紹介で壽屋宣伝部に中途採用され、PR 誌『洋酒天国』の編集やウイスキーのコマーシャルで有名となります。

この頃に芥川賞を受賞（裸の王様）し、独立し文筆業に専念します。

昭和 39 年（1964 年）に朝日新聞社臨時特派員としてベトナムの最前線に出ました。

反政府ゲリラの銃撃に遭って、総勢 200 名の内 17 名の生還者でした。

ベトナムでの戦争体験による作品でも有名となります。

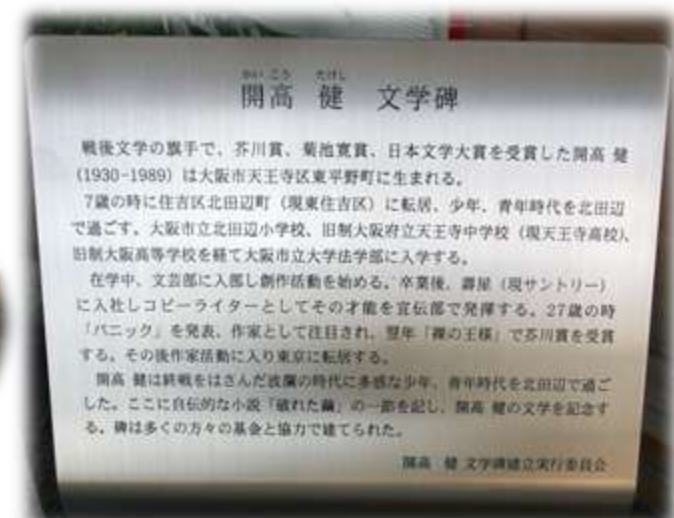
また、釣り道楽者としても知られています。

平成元年（1989 年）に食道癌の手術を受けましたが、その後、食道腫瘍や肺炎を併発して 58 歳で死去し、墓所は鎌倉・円覚寺にあります。

死後、開高の業績を記念して開高健ノンフィクション賞が創設されました。

また、後半生の 16 年間に過ごした神奈川県茅ヶ崎市に開高健記念館が開設されています。

当顕彰碑は開高健が北田辺に住んだ小、中、高校の頃を記念して、有志の募金により近鉄北田辺駅前に平成 17 年（2005 年）11 月 5 日建立されたものです。



21. 覚林寺の井戸と堤

真宗大谷派に属する覚林寺の西側を、旧狭山西除天道川(西除川)が北上しており、その左岸と思われる場所には、昭和の中頃まで堤が南北に長く残っていました。

また、地名の「湯里」にあるように、江戸期には「湯屋島村」とか「湯谷村」と呼ばれて、温泉が湧出する町でもありました。

寺の西隅に枯渇した井戸があり、これが温泉跡と言われています。

しかし、「摂津郡談(※)」によれば、元禄(1688年～1703年)の頃には既に枯渇し、『その旧泉を慕い井を掘らしめ湯谷井という』と述べられています。

この井戸の位置から、南々西 1.5km には「ふれあい温泉」があり、現在も温泉が沸き出しています。



※「摂津郡談」

元禄 14 年(1701 年)に刊行された摂津国の地誌。原本は 17 巻 17 冊からなり、当時の名所旧跡、神社仏閣などが細かく書かれています。とりわけ和歌を尊重していたようで、地方の和歌名所を詠んだ歌の収録集的な体裁をとっています。



22. 枯木八幡宮

旧枯木村の古い町並の中に「こんなところに」と驚くくらい、さりげなく枯木八幡宮があります。かつての枯木村という地名に由来する社名の小さな神社です。祭神は火雷神(ホノイカズチノカミ)で、雷除や火災予防の神様とされています。由緒は不明ですが、境内の土を屋根土に混ぜておくと、落雷しないとの伝承があります。



23. 北田辺の大楠

市道(昭和町一西脇町)が計画され、大阪市が移転(撤去)を決定した時に、道路用地内にあった樹齢 300 年、周囲:3.3m、高さ 16m の大木を保存する運動が地元民から起きました。

地元民の有志が「北田辺の大楠の保存を考える会」を発足し、6000 名の保存署名を集め、公聴会で 57%の保存要求決議を経て、存続が決まったものです。現地では、4 車線の道路が楠の部分だけ、2m ほど内側に凹んで、敷設されています。

大木(特に楠)を切り倒すと、その人にたたりがあると恐れられた時代は過ぎたのかもしれませんが。



24. 行基の墓

公園南矢田 3 の二ヶ所の共同墓地内に、それぞれ行基菩薩の墓があります。

立派な墓ですが、有名な生駒竹林寺墓所や往生院火葬場跡は歴史学的に確認できますので、この墓は単なる「供養墓」だと考えられています。

また、大和川に掛かっている、府道 26 号線の大橋の名前が行基橋となっていますが、この橋に行基が関われる筈がないので、この地域での行基伝承には疑問が残るものの、行基の師・道昭が活躍した証拠(舟戸録)が瓜破にあるので、行基もこの地域に関わっていたことは否定できません。

従って、「行基や道昭や、その弟子達の指導を受けて開発された土地柄である」と考えるとも考えられます。



25. 近畿日本鉄道南大阪線(元大阪鉄道株式会社:通称大鉄)今昔

前身(明治時代)は河南鉄道と称し、河内柏原から河内長野の間を営業。関西本線(当時国鉄)と同じ幅の狭軌の軌道で、相互に貨物を輸送していました。当初は、汽車も走っていたそうです。



- ・大正 8 年(1919 年)、社名を「大阪鉄道」に変更
- ・大正 11 年(1922 年) 道明寺—布忍間
- ・大正 12 年(1923 年) 4 月、柏原—道明寺—大阪阿部野橋(当時は大阪天王寺)間が開通しました。(矢田、針中野駅開業、同年 12 月北田辺駅開業、当時から複線、1500V 直流電化)
- ・昭和 4 年(1929 年)に古市—橿原神宮間開通し、大阪電気軌道(大軌)と連結して、大阪阿部野橋—吉野間直通運転を開始しました。
- ・今川駅(最初、駒川駅と称していましたが、昭和 8 年(1933 年)4 月に改称)は、昭和 6 年(1931 年)に開業しました。
- ・昭和 18 年(1943 年)、関西急行に合併、戦時中の昭和 19 年(1944 年)、企業統合で近畿日本鉄道となりました。

昭和 47 年(1972 年)9 月の今川駅(その 1)

- ・以前は、今川駅から針中野駅の区間は、土手で、南海平野線の上を立体交差していました。
- ・現在は、阿部野橋駅から大和川まで高架になり(矢田・針中野駅は昭和 51 年(1976 年)に、今川・北田辺は昭和 62 年(1987 年)に)東住吉区内にある、各駅前には、商店街やスーパーがあり、特に、針中野駅前には、大阪の 3 大商店街の一つ、駒川商店街に隣接し、(なんでも揃う、値段が安い、買いやすい、などと)遠来の客も多く、年中賑わっています。開通当初、住宅はちらほらで、一面の畑と田んぼだったので、「鍬やおけ」などの農機具を担いで乗車する人もみられました。

(次ページへ続く)

東住吉 100 物語

・大鉄電車は、戦前は勿論、戦後も暫らくの間、扉は手動でしたので、車掌さんの労力は、大変なものでした。電車が駅に停車すると、車掌はプラットフォームに降り、電車の一番前辺りまで走り、乗客の乗降が完了したのを確かめて、合図の笛を吹き、発車準備完了を運転手に連絡します。すると、電車は徐行し始めます。（出入り口の扉は、乗客が乗降時に閉めますが、全ての扉が閉まっているとは限りません。）車掌は後方に小走りしながら、まだ、客が閉めていない扉を順次閉め、最後部の車掌室の入り口が自分の前を通過するとき、すばやく飛び乗っていました。ですから、時には、最後部の扉が閉まっていた（停発車時の反動で閉まるときがある）為、車掌は、電車に乗ることが出来なかったり、また飛び乗るタイミングがずれて、駅の手木製の柵などに片足が引っ掛かって振り落とされたり等のハプニングで、電車は車掌を乗せないまま、次の駅に行ってしまうこともありました。

今なら、大変なニュースになったとおもいます。振り落とされても、あまり大きな怪我をしたということを聞かなかったのは、その頃の車掌さんは、皆、運動神経が良かったからでしょう



昭和 47 年（1972 年）9 月の今川駅（その 2）

26. 百済貨物ターミナル駅

天王寺駅・平野駅で行っていた貨物取り扱いを集約するために作られた貨物専用駅。

昭和 38 年（1963 年）開業。

昭和 39 年（1964 年）大阪市中心卸市場東部市場への貨物線として百済～東部市場内が開業。

その後、トラックによる運送手段が中心となったので、昭和 59 年（1984 年）2 月 1 日百済～東部市場間の貨物線が廃止されました。
（円弧を描く道路はこの名残りです）



戦前からこの付近に百済駅（関西線）が置かれていましたが、現在の東部市場前駅に新設されたのは平成元年（1989 年）11 月 11 日です。

また、平成 25 年（2013 年）3 月、梅田貨物駅の機能が当駅と吹田貨物ターミナル駅に分散移転されることに伴い、改修事業が鉄道建設・運輸施設整備支援機構により進められ、新たに百済貨物ターミナル駅として生まれ変わりました。

百済貨物ターミナル駅 広域避難場所に指定されています

27. 百済の地名

区内での百済の地名は、明治 22 年(1889 年)に鷹合、砂子、湯谷島、中野の 4 ケ村が合併して、南百済村とされたことに因みます。現在は南百済小学校や百済公園に百済大橋などに、その地名が残るのみで、行政上での地名はなくなっています。

日本書紀(続)から、東住吉の百済との関係を探すと、

(1) 持統天皇 7 年(693 年)紀 1 月条

第 31 代百済王・義慈王は唐や新羅に攻められて、大和王朝に救援を依頼し、2 人の皇子(豊璋と善光)を派遣した。

(2) 齐明天皇 6 年(660 年)紀 7 月条、天智天皇 2 年(663 年)紀 8 月条

百済(豊璋)に援軍を付け、百済遺臣・佐平鬼室福信に迎えられて遠征した(齐明 6 年紀)が、白村江で惨敗し、百済は滅亡し、豊璋は行方不明(天智 2 年紀)となる。

(3) 天智天皇 3 年(664 年)紀 3 月条

残された善光に難波(天王寺区堂ヶ芝・百済寺跡と細工谷・百済尼寺跡)に住まわせる。

以後、天武天皇、持統天皇の時期には百済王として、優遇されており、百済人が善光を頼って続々と亡命してきたので、この一帯を百済と呼ばれるに至った。

(4) 聖武天皇(続) 天平 21 年(749 年)紀 4 月 22 日条

善光の曾孫・敬福(キョウフク)は、大仏建立のために黄金 900 両を献上し、従 5 位陸奥守から従 3 位河内守に 4 階級も特進したが、一族の住む場所が次第に物流や交通の要所となるに及んで、天皇は敬福一族を枚方の地に移住を命じ、難波の百済は消滅する。

(5) 現在の百済王の末裔

百済王家は平安末期に三松と改姓している(枚方市史、史上の人物、433 頁)が、平安期に三松性が現れていないので、この説は歴史学的には認められていない。しかし、枚方市禁野 1 丁目に立派な三松家の墓地があり、百済王族末裔の墓であるとされている。また、明治初期における砲術家や神官となった三松家の 4 人の経歴を枚方氏史は百済王族の子孫と伝えている。枚方市の百済寺跡は廃墟となっているが、国指定の史跡である。

東住吉区に残る百済地名



上・百済大橋

下・南百済小学校



28. 杭全交差点

国道 25 号(奈良街道)、森小路大和川線(今里筋)、美章園街道という幹線道路が交差し、大阪市内でも有数規模の 5 差路交差点です。この交差点は昭和 35 年(1960 年)まではロータリーでしたが、昭和 35 年(1960 年)7 月に交差点内に信号機が設置されロータリーがなくなりました。

杭全交差点には横断歩道がなく、昭和 43 年(1968 年)に設置された歩道橋が交差点に進入する 5 方向からのそれぞれの歩道をつないでいます。

森小路大和川線は戦前から工事を始められていましたが、戦争期の中断をはさんで全線が開通したのは昭和 47 年(1972 年)でした。

歩道橋が設置された当初は、歩道橋には自転車及び車椅子等のスロープが設置されておらず、自転車が認められた歩道を走行した場合、交差点で行止まり状態になっていました。様々な問題を解決すると共に老朽化した歩道橋の取替について、平成 18 年(2006 年)より国と地元で協議され、平成 25 年(2013 年)5 月より架替工事が開始され、平成 26 年(2014 年)10 月にエレベーターがついた陸橋として利用が開始されました。(歩道部分は平成 26 年(2014 年)6 月利用開始)

昭和 38 年(1963 年)の杭全交差点



杭全交差点平成 15 年(2003 年)

交通関係では

① トロリーバス

杭全～守口間を昭和 37 年(1962 年)～昭和 45 年(1970 年)迄運行していました。

② 関西線(JR 大和路線)

湊町～柏原間明治 22 年(1889 年)開通。湊町～奈良間明治 23 年(1890 年)開通。

天王寺～平野間高架工事昭和 43 年(1968 年)完成。

高架になるまでは「杭全開かずの踏切」といわれていました。

蒸気機関車・ディーゼル車から電化になったのは昭和 48 年(1973 年)です。

東部市場前駅は平成元年(1989 年)11 月 11 日開設しました。

29. 杭全法界地蔵

杭全には古くから（寛政4年（1792年）建立）、大きくて（お頭だけで37cm）立派なお地蔵さんがあります。

珍しいことに肝心のご本尊は雨ざらし、拝む所は屋根付です。

お堂も無かった昔は、雨のとき、暑さ寒さのとき、見かねて笠や頭巾をかけていました。しかしすぐ風で吹きとばされてしまうので、「地蔵さんは覆いが謙いだ」と解されたいわれがあります。

建立時の祭具には「新在家前地蔵」と刻まれていますが、今は「杭全法界地蔵尊」とよばれています。

新在家は杭全の旧地名で、法界とは大宇宙を含むあまねくという広い範囲で、一切の願いごとを叶えてくれる格の高い地蔵さんであることを表しています。

大型であり、しかも半跏座（片足が垂下）の地蔵菩薩は珍しく、老若・遠近に拘わらず年中参詣者が絶えません。



30. 桑津天神社

「日本書紀」によると応神天皇(4世紀)の頃、日向の国から美女の誉高い、髪長媛(かみながひめ)※を召され桑津の地に住ませたと記されています。媛はのちに仁徳天皇の妃となりました。

髪長媛は桑津天神社に奉祀される以前は、明治6年(1872年)廃寺となった金蓮寺が髪長媛の宮跡であった関係で、境内の八幡宮に奉祀されています。

また桑津天神社には少彦名命(すくなひこなのみこと)も祀られていますが、これは髪長媛の病氣祈願のため医薬の祖神である少彦名命が祀られたとの伝えによっています。

※髪長媛(かみながひめ)

髪長媛は、現在の宮崎県都城市早水町の早水神社の早水池のほとりに生まれたという伝説があります。早水神社の祭神は応神天皇・牛諸井(うしもろい)・髪長媛の三柱です。

髪長媛と仁徳天皇との間に、大草香皇子と幡梭皇女(はたひのひめこ)が生まれました。

「日本書紀」によると、大草香皇子は妹の幡梭皇女と結婚する大泊瀬皇子(後の雄略天皇)に美しい「押木玉纒(おしきのたまかづら)」を献上したと記されています。

しかし、大草香皇子は根使主のざん言により安康天皇に刺殺され、髪長媛と娘の幡梭皇女の最後は不明となっています。

髪長媛の名前は桑津天神社におまつりしているだけでなく、同じ名前でもいろいろな地方にも見られます。

伝説的色彩がきわめて強く、古代では「髪」は人名ではなく一般に若い女性をさし、機織り(はたおり)の名手で黒髪長く背丈以上もあったのでこう呼ばれたともいわれています。



桑津天神社正面